

# 国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所  
〒259-1293 平塚市土屋 2946  
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス  
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

## ジェフリー君の<星条旗 TATTOO—刺青>

石 積 勝

今年もカンサス大生が平塚キャンパスで約 5 週間学び、神大生に刺激を提供してくれた。僕も 2 回ほど英語での日本論を担当したのだが、逆に、僕の担当クラス「国際政治学 I」にゲスト出演もしてもらった。たまたまその週はアメリカの 60、70 年代のベトナム反戦・黒人解放闘争・カウンターカルチャー・ケネディ暗殺などを扱ったビデオ映像を見る予定であったので、それを 30 分ほど一緒に視てもらい、その後日本人学生との討論となった。喜び勇んで出演してくれた 5 人のカンサス大生が 160 名の日本人学生を前に、われ先にとばかりに発言してくれたのは予想通りだった。30 分間の映像ではデモ行進のシーンが溢れていたからだろう。日本人学生が質問する。「カンサスの皆さんの中でデモに参加したことのある人は？」5 名中 3 名の学生が手を挙げる。これには僕もちよっとビックリ。これに対して日本人学生は 160 名中 1 名。

5 人の中の一人ジェフリー君は、「同性愛者の権利擁護」のためのデモ、「イラク反戦」、「貧困学生のための学生寮建設」を求めるデモ、などに参加したと公言していた。チャンスがあれば是非またこのクラスに参加したいという。

彼の出番は翌々週にまた訪れる。何かのきっかけで、「愛国心」について大議論になった次の週、その議論を引き続きやることになった。そこに件のジェフリー君、他の日本人学生数名と共に再登場である。議論は<Nationalism> と <Patriotism>、<愛国心> と <愛郷心> の微妙な違い、さらには<共同体> と <個人>、<公> と <私> というような、なかなかいい線

で自然に進み、僕も大満足だったのだが、なんといってもやはり主役はジェフリー君になった。ジェフリーの雄弁のことではない。彼の TATTOO<イレズミ—刺青>である。

リベラルあるいは反主流系のデモに何回も参加しているジェフリー君だから、当然彼は「愛国心」とは最も遠いところにいる男だろう、もっと言えば「愛国心」に拒否反応を示す男だろうと思っていた僕らは完全に裏切られることになる。彼は皆の前でシャツをまくりあげた。そこには赤・白・青でバッチリ描かれた<星条旗>のイレズミである。太々とした右腕上部に彫り込まれた——でも星の数が 20 個ほど足りない。いくら太腕でも 50 個はなかなか彫れないらしい——<スターズ・アンド・ストライプス>を誇らしげに掲げながら彼は言う。「自分は愛国主義者だからこそデモに行く」と。

「日本の左翼も、<日の丸のイレズミ>して反戦デモに行けよ」と誰かが言う。「だから日本では<愛国心>が右側の人たちにハイジャックされているのが問題なんだよ」とまた別の学生が言う。学生たちの「愛国心」をめぐる議論は一部日本人学生の間でいまだに続く。一方ジェフリー君のほうは 5 週間の神大での研修で日本国憲法第 9 条に出会い、それを支持する内容の、自分自身で書いたエッセイを携えてカンサスに帰った。

ところで彼のあのイレズミは本物だったのか、それとも 2-3 週間とれちゃうフェイクのやつだったのか？聞くのを忘れてしまった。僕は、一生モノの本物と見た。

(常任委員/いしづみ・まさる)

**2007年度新規共同研究プロジェクト**

2007年度新規共同研究プロジェクトは、次の3プロジェクトが採択されました。各プロジェクトのタイトル、共同研究者、研究の目的、期待される成果について紹介します。それぞれ意欲的な研究成果を目標としており、期待できるプロジェクトです。

①オータナティブの国際社会統治。プロジェクトメンバーは、石積勝教授(代表)、常石敬一教授、その他外部参加者。研究の目的として、現在進行中の「オータナティブの国際貢献」をさらに深め、政策策定の基底となる社会科学の認識枠組みのパラダイム転換を図る試みとして、このプロジェクトは位置づけられる。「オータナティブの国際貢献」プロジェクト・ペーパー (No.13) は国際貢献そのものに焦点を当てているが、新プロジェクトは、さらに根源的な理論・政策研究を目指す。期待される成果としては、わが国の外交議論・外交政策にも影響を与える可能性を持つものとして、プロジェクトを位置づけている。国連大学をはじめとする国際機関などと連携をとり、国際平和構築へ向けた理論的・政策的ブレークスルーを提供することを目指している。

②P.F.ドラッカー研究。メンバーは後藤伸教授(代表)、海老澤栄一教授、坂井原良夫客員研究員、照屋行雄教授、三村真人教授。ピーター・ドラッカーはその60年以上におよぶ文筆ならびに研究活動により、われわれが今日でいう「マネジメント」の開拓者かつ推進者としてよく知られた人物である。かれの問題関心と研究成果は、狭義のマネジメントのみならず、組織、知識に関する社会学的・哲学的な考察にもおよんでいる。研究プロジ

ェクトでは、この20世紀の知の巨人ともゆべきドラッカーについて、経営学、会計学、歴史学などのさまざまな立場からのアプローチを試みるなかで、各人のより広い意味でのマネジメント研究の深耕に役立てることを目的としている。期待される研究成果としては、次の諸点があげられる。1) 知識産業社会における組織と個人の関係について新たな知見をもたらし、また今後両者の進むべき方向性を明確化すること、2) その研究成果は国際経営研究所の他の研究活動とオーバーラップしながら、研究所の新しい活動領域を切り開くことが期待される、3) ドラッカー・マネジメントに関する研究成果の、企業、地域への還元について有用なヒントを得ることが期待される。

③アジアのコーポレートガバナンスと経営文化。プロジェクトメンバーは丹野勲教授(代表)、小島大徳准教授、高城玲助教。研究目的として、アジア、特に中国、東南アジアでのコーポレートガバナンスと経営文化について研究。コーポレートガバナンスについては、アジアの企業制度、企業法制、コーポレート原理などを中心として研究する。経営文化については、アジアでの文化、社会についてフィールドワーク、現地調査、文献・資料をもとに研究。期待される成果として、アジアのコーポレートガバナンスについては、ほとんどまとまった研究成果が報告されていないので、本プロジェクトは先駆的研究になるであろう。また、アジアの経営文化についても、企業経営をとりまく環境を中心とした経営文化研究が少ないことから、この分野においても貢献できるであろう。

## 師匠からの手紙

小島大徳

先月、私の師匠から1通の国際郵便が届いた。それは短い手紙であったが、私にとって泣けるほど感激し、身が引き締まる文章を含んでいた。「さすがコーポレート・ガバナンスの専門家の仕事ぶりだとお見受けしました」と。私は、年度初め、多くの先生方に過年度作成した論文を送ることにしている。他の人にとっては何気ない言葉でも、私にとっては何よりも有り難く、そして暖かい言葉であった。師匠からこのような言葉を頂けるとはおもいもせず、同時に私が目指す将来の人間像を明確にできた瞬間であった。

思いおこすと、私が大学院生であった頃、コーポレート・ガバナンスの研究は諸説紛々としているブラックボックス状態であった。この頃から、この状態を打破しようと、コーポレート・ガバナンス原則というツールを使い、コーポレート・ガバナンス論の確立を試みた。その過程で博士の学位を取得し、『世界のコーポレート・ガバナンス原則』文眞堂、2004年、を公刊した。この研究は、大学院生時代に終えるつもりであった。しかし、思いの外、この研究は奥が深く、企業観などの経営学の核心を突いた内容を含んでいたため、大学教員になった後も継続して研究を行っているのである。

さて、コーポレート・ガバナンスは、企業不祥事への対処と企業競争力の強化とを組み合わせる企業経営システムの構築を目的としている。そのために、外部者による監視・監督や、内部者による透明性・効率化などを中心に議論が行われている。しかし、近年の企業不祥事は、これらのシステムによって発見されたわけでも、解決がなされたわけでもな

い。具体的には、内部告発によって不正が明るみに出て、マスメディアによって経営者の辞任が繰り返されている。そうすると、この研究が盛んに議論されても、その成果が生かされていないのではないか、との疑問が沸き上がらなければならない。しかし、どういふわけか、この事実について皆が口をつぐむ。

そこで私は、この事実を認めることから研究を行わなければならないというスタンスをとる。そして、その前提となるのが、市民社会を前提とした企業の存続という研究方針である。最近では、この研究によりコーポレート・ガバナンスの将来像がみえてきたと感じている。その研究成果が、2007年9月に公刊

予定の『コーポレート・ガバナンスと市民社会』文眞堂である。この研究に道筋を立てたところで、私は3つの研究テーマを得ることができた。

期待を込めて述べると、この研究は、10年後、1つの学問分野を形成するものであると確信している。その詳細は、2007年9月に開催される「日本経営学会第81回大会」と「日本経営教育学会関東部会」で相次いで報告を行う。

私は過去の自分の研究を顧みることがあまり好きではないという悪い癖がある。そのせいで、これら3つの研究を確立し2010年頃に次なる成果を著書として公表したいと、まだ次の研究成果が公刊されていないのにも関わらず目論んでいる。これは、私の研究に目ざめさせてくれた師匠である鈴木輝二先生の「書き続けなさい」という言葉と、研究の本質を徹底的に鍛えてくれた師匠である平田光弘先生の「思いっきりやりなさい」という言葉が根底に流れているからかもしれない。

(所員/こじま・ひろとく)

## 研究余滴

### 現在進行中のプロジェクト

継続プロジェクト:①教員採用試験研究(鈴木そよ子教授、関口昌秀教授)。②ジェノサイドの研究(木村准教授、泉水准教授、齊藤教授、石積教授)。

本年が完成年度であるプロジェクト:①米軍行政下の琉球諸島における学術的地誌調査活動の研究(泉水英計准教授、新垣公弥子准教授)、②公企業の利益概念に関する調査研究(関口博正准教授、アサモア教授、大田客員研究員)

特別研究:SME研究センター(中小企業の経営環境と経営革新;田中教授、金谷教授、三村教授、石積教授)、STS研究センター(科学・技術・社会;常石教授)

### 常任委員会の役割分担

国際経営研究所常任委員会の役割分担が決まりました。企画総務担当(石積教授)、研究調査担当(三村教授)、地域交流担当(松岡教授)、出版広報担当(行川教授)。上記4先生は経営学部での経験も長く、研究所運営について貴重なアドバイスをいただけると確信しています。

### 客員研究員の任期延長:畑中邦道研究員

畑中氏は本学大学院経営学研究科で博士(経営学)を取得後、本研究所のさまざまな研究プロジェクトに参加、数々の成果をあげてきました。大学院経営学研究科でも非常勤講師として学部に貢献されています。

### 客員研究員の採用規定変更

2007年度より、客員研究員の採用は研究所ではなく、学長の承認事項となりました。

### 第3回インゼミ大会

経営学部主催、国際経営研究所、国際経営学会後援の第3回インターゼミナール大会が11月21日に開催される予定になっております。2006年度(第2回大会)では学術研究部門(経営分科会、会計分科会、国際分科会)、新規事業計画部門に41チーム、3年生を中心に約250名の学生が参加し、熱気あふれる議論がみられました。発表テーマも我経営学部がカバーする広い学問領域を反映して、実に多彩な内容でした。インゼミは、当学部における学生の研究発表の場として、また学生の成長を実感する場としても重要な役割をはたしています。第3回大会も、昨年以上の成果を目指し、先生方はゼミ生の積極的な参加のよびかけをお願いいたします。

### 『国際経営フォーラム』No.18/2007の発行

国際経営研究所の機関紙『国際経営フォーラム』No.18/2007が発行されました。特集は「組織とリーダーシップ」として編集され、特集コーナーには、海老澤栄一教授の「組織行動と有機的に連動したリーダーシップ特性」、金宇烈客員研究員の「中小企業における知識ベース経営の実践」、小島大徳准教授の「コーポレート・ガバナンス原則と市民社会」の3論文が掲載されています。その他、共同研究2本、研究論文5本を含め、トータルで本文189ページとなりました。

関係各位にはすでに配布してありますが、本誌の必要な方は当研究所事務局までお問い合わせください。

